Career Power

The 21th Library Fair & Forum Document

第 21 回図書館総合展
キャリアパワー主催フォーラム記録

2019 年 11 月 14 日 パシフィコ横浜にて開催

これからの大学教育の価値とは
～総合学園の観点からみる、大学教育と図書館のあり方～

【講師】　西川　幸穂　（学校法人立命館　常務理事）
【進行】　木村　麻美子　（株式会社キャリアパワー取締役執行役員本部長）

【キャリアパワー：木村】
それでは定刻になりましたので、キャリアパワー主催フォーラムを開催させていただきます。本日は大変お忙しい中、全国から図書館関係者の皆様に多数ご参加頂きまして、ありがとうございます。本日進行させて頂きます、株式会社キャリアパワー事業本部の木村と申します。どうぞ宜しくお願い致します。

私共キャリアパワーは、京都に本社を置く総合人材サービスの会社でございます。
その中でも特に、大学、教育機関、図書館といった業界にご縁を頂き、おかげさまで、現在全国で多数の大学様へ人材のご提案、また大学図書館の運営のお手伝いをさせて頂いております。
さて、本日のフォーラムのテーマは、『これからの大学教育の価値とは～総合学園の観点からみる大学教育と図書館のあり方～』とさせていただきました。
弊社ではこれまでも、毎年この図書館総合展でフォーラムを開催させていただき、大学図書館に求められる役割や機能について、様々な視点から御講演をいただいてまいりました。
例えば、図書館の中で、ラーニングコモンズをどのように設計し、学生にアクティブラーニングを促していくのか、あるいは大学がグローバル化に向かっていく中で、図書館が担う役割とはどういったものか、あるいは書架の狭隘化といった問題に対してどのように対応していくのか。いろいろなテーマをこれまでも設定させて頂いてきた中で、さあ、今年のフォーラムはどういった事をやっていこうかなというふうに考えた時、今回は、少し視点を変えて、もう少し俯瞰的、マクロな視点から、今後の大学図書館はどういう方向に向かっていくのかな、そんなことを考え、今回のフォーラムテーマを設定いたしました。

大学図書館が今後どのように変わっていくのかを考えようと思うと、やはりその母体となる大学教育がどのような方向に向かっていくのかということをしっかりと見据えておく必要があると考えています。
そしてこの大学教育がどのように変わっていくのかを考えた時、もう少し前の段階、小学校や中学高等学校、このあたりの教育の変化がひとつのヒントになるんじゃないか、そんなことを考え、総合学園として、小学校から中学高等学校、大学と、一貫教育を進めていらっしゃる学校法人立命館の西川常務理事にご相談をさせていただいたのが、今回のフォーラム実現のきっかけです。

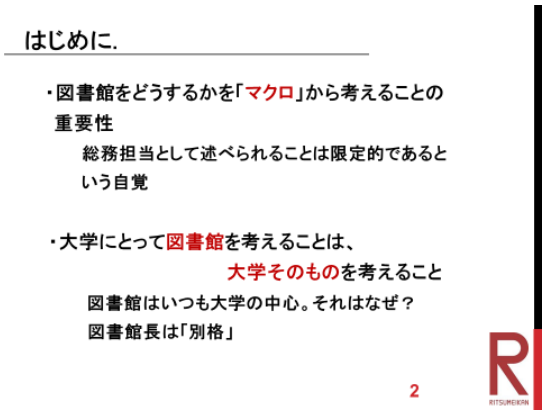
私どもも、立命館小学校をはじめとする、立命館大学の各附属校と一緒にお仕事をさせて頂くことがございます。そうすると、そういった附属校での教育がとても先進的で、私たちの時代とは全然違う、と感じます。例えば、立命館小学校では１年生から英語の授業がありますし、ロボティクス科といった授業もあります。学年があがっていくと、学んだ知識を活用しながら、海外の児童、小学生とインターネットで繋がりながら一緒に授業を作り上げていくようなこともやっていますし、小学生でありながら２ヶ月間といった長期間、海外留学に出て行く子供たちもいます。またプレゼンテーションにもすごく力を入れておられ、マイクロソフト社から講師を招いた本格的なプレゼンテーション大会が開催されたりしています。
こういったことを聞くと、自分自身が小学生だった頃と比べると、授業の内容も手法も、求められるアウトプットも本当に変わってきていると感じます。そういった教育を受け、自分で海外の学生、海外の人たちと瞬時に繋がりながら共同でプロジェクトを成し遂げていく、そんな力を身につけた子供たちが、小学校を卒業して６年後には大学に入学してきます。そう考えると、大学に求められる機能、大学図書館に求められる機能も、またすこし違った視点から見ることができるのではないかと思います。

本日のフォーラムでは、大学を取り巻く環境が大きく変わっていく中で、今後の大学教育の価値、そしてそれを支える図書館の価値がどのように変わっていくのか、どんなことが求められるのか、学校法人立命館の総合学園としての視点から、常務理事の西川様に御講演をいただきます。
本日のこのフォーラムが、ご参加いただきました皆さまにとって、少しでも何か御参考になることがあればと願っています。それでは西川常務理事、どうぞよろしくお願いいたします。

【学校法人立命館：西川幸穂　講演】
皆様こんにちは。学校法人立命館で常務理事をしております西川と申します。
先程、キャリアパワーの木村本部長から、立命館の小学校の話も含めて少しご紹介いただきました。最初にお断りしなくてはいけませんが、私は図書館を熟知している訳ではありませんし、将来の図書館像について語れるほどの勉強も率直に言ってしていません。ですが、いつもいろんな部署の職員と話をする時に共通して感じるのは、それぞれの部署による違い、つまり相違点を軸に課題を整理していくと、課題がどんどん細分化されていって、解決してもまた新たな問題が生まれてくる、といったことがよく起こっている、ということです。
日頃、図書館でお仕事をされていても、そういったことが沢山あるんじゃないかと思います。新しい小さな課題というか、それぞれの持っている課題に追われることが沢山ある。ただ一方で、それらの共通点つまり大学は今どういうふうになっているんだろうとか、社会が今どうなっているんだろうという事を、時々は俯瞰してみて、自分達が働いている図書館がどうなっているんだろう、どうしていったらいいんだろう、と考える機会を持つことが、私はとても大

事だと思います。図書館だけではなくて、教務をやっている人、学生支援をやっている人、すべての領域において、そのようなことは言えるのではないかと思います。
最近、大学職員の中でも専門性という言葉が結構言われるようになってきました。職員それぞれ、何か専門的な力を持っていないと、これから先、大学の中でやっていけないんじゃないかという部分もでてきているのも事実です。ただ専門性というのは、確かに深い知識と勉強で身につくこともありますが、やはり広い視点でその領域のことを学んでおかないと、結局は学んだ専門性は役に立たないというふうに思います。
ですので、本日はどちらかというと広い視点でお話をさせていただきます。立命館の図書館の詳細を聞きたい、ということであれば、うちの図書館の職員に代わりますので、それはそれでまた聞いてください。今日のお話の趣旨は、先程木村本部長からあったようなことであるということを、最初にお断り申し上げておきます。

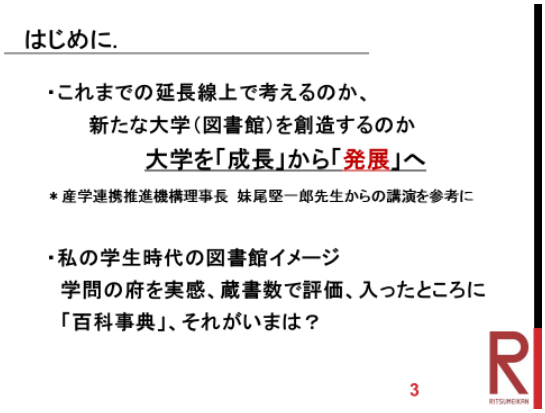
本学もキャリアパワーさんには大変お世話になっております。私はいつも人材派遣の会社の方々とお話していて思いますが、私たちが大学を見ている目と、キャリアパワーさんや、そういう人材関係で大学に職員を送ってくださっている企業の皆さんが見ている目とでは、やはり違います。話しをしていると、そこに色々発見があったり、おもしろいことがあったり、そうか、と考えさせられることが沢山あるわけです。したがって、キャリアパワーさんとはもう長いお付き合いをさせて頂いていますが、やはりちょっと違う視点で見るということはとても大事だなと、いつも気づかされています。
そんなことで、恩返し、というわけではありませんが、少しだけ立命館のご紹介をさせて頂くことを通じて、また皆さんの大学や職場でも参考にして頂ければ、と思います。



先程の話しましたように、私がしゃべれることは限定的ではありますが、大学にとって図書館というものを考えるということは、大学そのものを考えることだといつも思っています。大学の中での図書館の位置の大きさというか存在感の高さというのは、入学したときにまず衝撃を受けます。あるいは、図書館長というのは格別に、偉い先生であったり、大学に入ったということを実感する象徴のひとつが図書館であり、あるいは図書館というものの凄さに出

会うのが大学であると思います。図書館と大学というのは非常につながりが深いといいますか、切っても切れないものです。
その図書館だけがどんどん変わっていかないといけないのかというと、実はその前提に、大学が大きく変化をしているということがあります。そういう意味では、大学、あるいはその図書館というのは、昔はある意味、外形的、権威的、象徴的な存在であったかもしれませんが、今はやっぱりソフト面での存在、何か出会える場所というのでしょうか、そういうものになっていっているのではないかと思います。
知的刺激は、色々な場所で受けられるようになっています。先生方の研究においても、図書館の本だけが頼りというわけではなくて、様々な情報の入手方法が広がっています。そういう中で、図書館に行くとどういう発見があったり、どういう刺激が受けられたり、どういう学びがあるのか、といった中身が問われていくと考えています。
そういう意味で、やはり図書館がいつも大学の中心であり続けるためには、私はそういう存在は必要だと思いますが、図書館に行って、刺激されて豊かになって帰れる、学びの質が高められる、ということが大切です。そのために、たぶん各大学でも、ラーニングコモンズや様々なサービスを用意されたり、運用されたり、空間を用意されたりしていると思います。後ほど申し上げますが、それには正解はきっと無い、と思うんですよね。立命館の図書館はこうしている、〇〇大学はこうしている、というのはあると思いますが、どっちが正しいとか、どっちが良いものだとかいうのは、なくなってきていると思います。
以前は図書館というと、蔵書数が何万冊だとかいうことで図書館の凄さを見る、みたいなことがありましたが、今、それで勝負しようとする、それで図書館の位置づけを説明されている大学というのは、なくなってきているんじゃないでしょうか。そういう意味では、どんなサービスがあるのか、あるいはそのサービスを受けてどのように図書館を使っていけるのか、そういったことが大事だなと考えています。

そういう視点から考えれば、大学そのものがどうなっていくのかということを考えることに加え、私どもは総合学園ですので、小学校・中学校・高等学校の児童、生徒が大学に入学してきます。どんな教育を受けた生徒が大学に来るのか、ということに、もう少し思いを寄せないといけないなということを昨今深く感じていますので、そんなことを少しお話できればと思います。



そこで次のスライドには、新たな図書館をどう考えるか、ということに関して、「『成長』から『発展』へ」と書きました。皆さんは図書館あるいは大学を、成長させた